

中央アジアの梵語仏典

湯 山 明

はじめに

中央アジアという呼称は、歴史地理学の上で、かならずしも明確な境界をもつ地域を指すものではない。内陸アジアといい、西域といい、陸のシルクロードといい、すべて同じことである。インド亜大陸および東南アジアのインド文化圏を除いた地域に限定しても、問題は解決されない。

本稿が、将来の研究の発展を期待しての書誌学的な報告を意図するものであつてみれば、地域を狭く限ることよりも、他の地域で新たに発見された資料の情報にも、

經典成立史・原典批判などに関心をもち生徒の注意が惹かれよう。

一つ例を挙げれば、ランカー島に遺る梵語典籍、とくに大乘 (Vajrayāna) の仏典伝承については、どちらかというと過小に評価され看過されてきた感があるが、今後この方面の研究の進展が期待される。(1) こうした中で、アヌラダプーラ (Anurādhapura) のチエータ林園 (Jeta-vanarāma) の発掘現場から、つい最近 (一九八二年十二月十八日早朝に) 土中より発見されたボーティー型(2)の純金六葉(總量約二キログラム)は、九世紀頃のシンハラ文字で彫られた般若經典の断片 (ca. 63.5×5.8×0.57 cm) (3) 。

當時の大乗經典供養の一証左としても、興味深い出来事であつた。(3) 該經典の比定・校合が、鶴首して俟たれる。

なお、大陸部の東南アジア山岳地帯に、梵語仏典が、たとえ断片的にも保存されているのではないかとの期待があるが、現状ではほとんど全く知る由もないのが残念である。

中国の雲南省一帯の調査が進むと、いま謂われている照葉樹林帯文化圏での仏教の伝播の解明にも、光があたることになる。一九八二年に、与えられたほんの束の間に、筆者も二三の梵語仏典資料を昆明で実見したことがある。ことに仏頂尊勝陀羅尼を筆頭に多くの真言陀羅尼や般若心経なども、悉曇系梵字で彫られて、碑文として今日に伝えられている。(4) その仏教文化の流入経路を、ビルマ經由・チベット經由あるいは漢族の影響とみるかなど、(5) 歴史的にも複雑で、速断は慎しむべきであるが、インド的要素の東漸は否定できまいし、将来の課題としてきわめて興味深い。(6)

元代に至ると、チベット系仏教と共に中国の中原に移入されたランチャ (Lan-tsha, Rantia) 文字が、広く流行

して用いられるようになり、さらにくだって十七世紀末から十九世紀にかけての、北京の諸仏寺の印經院の出版活動には、目を眩るものがある。いわゆる北京町版の誕生である。就中、一七二二年創立の嵩祝寺などは有名である。(7)

北京町版の中には、梵藏両語文を並記した仏典もあり、仏教梵語文献学の上からも貴重である。(8) 旧帝政ロシア学士院などは、真先にかかる資料の蒐集に努めた。(9) その後、多くの学者や研究機関も集めたが、チベット文献の目録に載つて、(10) インド仏教学徒の注意をあまり惹かなかつた嫌いがある。たとえば、オーパーミラー (E. H. Obermiller 1901-1936) の仏母宝徳藏般若波羅蜜經の梵藏原典の校訂本 (Leningrad 1937) は、第二次大戦後、覆刻出版されるまで、入手不可能であつたが、彼が用いた底本は、ほかならぬ北京町版のみであつて、世界に現存する数点のうちの二本は、日本に将来保存されていたのである。(11) 間違ひなく北京町版と思われる、同經の梵本の小破片一点を、筆者は一九七九年に訪れた吐魯番県展覽館に見出して驚いた。知る限り唯一の梵本木版本を、シ

ルクロードのオアシスの町で、眼のあたりにしたからである。写真撮影は許されず、意気銷沈して帰国してのち、偶然にも日本でその写真を見つけて驚喜した。⁽¹²⁾同展覧館では、ベゼクリック千仏洞で出土した、八思巴(Phags-pa)文字の元代の仏経印本との説明書きがあったが、九十度向きを変えれば、紛れもなくランチャ文字であり、時代も下った北京町版の類であろう。不完全な断片の僅か十二行の文中に、意味・韻律上からも正しい唯一の異説の見出せることから、貴重なものである。

ヒマラヤ山系の南岳地帯から、今後重要な写本の新しい発見が、期待できるようになってきた。すでに多くの貴重な資料が、研究者の机上に載ったが、さらに将来の展望も明るさが増している。⁽¹⁴⁾

ついでながら、写本を含めて人類の文化遺産の発見と保存は、緊急事であるが、信仰篤い仏教徒の理解を求める、慎重な努力も忘れてはならない。多くの時間と根気が必要である。十分な見識をもった日本人の物心両面の援助が、期待されている。

わが河口慧海(一八六七—一九四五年)が、一九一六年に、

チベットの舍魯普(Shāu, Śva-lu Ri-phug)寺から日本に

将来した、一〇七〇年十月十二日の日付入れの梵文法華経⁽¹⁵⁾をはじめとした写本類、サンクリティヤーナ(Kahula Sanktiyāna 1893—1963)の膨大な調査報告からしても、チベットが仏教梵語典籍の一大宝庫であることは疑いない。北京の民族文化宮の図書館に、相当な数にのぼる梵語仏典の写本が、チベットから将来・保管されているといわれる。中でも、サキヤ(Sa-kyā)寺から将来されたとされる、一〇八二年の日付のある貝葉写本は、謂う所のクティラ(Kutiā)文字で書写された、完全な法華経梵本⁽¹⁷⁾で、きわめて保存の状況がよく、複製版の近刊が予告されている。

チベットでは、いまだに数多くの僧院などで、貴重な写本が保管されていると伝えられている。大いなる文化遺産が、人類共有の宝物となることを願って止まない。写本類の中には、唯一つのみ存在を知られる写本の報告があつて、すでに半世紀も眠らされているものもある。たとえば、ハリバドラ(Haribhadra)の宝徳藏般若⁽¹⁸⁾若に対する注釈書(貝葉写本)が、然りである。

梵語仏典研究の端緒

外交官ホジソン(Brian Houghton Hodgson 1800—1894)は、カトマンドウに駐在するや、直ちに当地の文物に興味を抱き、一八二四年頃には、梵語仏典の蒐集を始め、一八二七年から写本類を、各地の研究者や研究機関に寄贈・譲渡した。一八二八年に公刊された、彼の二論文⁽¹⁹⁾は、西欧のインド学徒に、大きな衝撃を与えた。西欧の学者が、梵語の位置について、ジーンズ(William Jones 1746—1794)から、大きな衝撃を受けてのち僅か四十年的ことである。⁽²⁰⁾

ほとんど時を同じくして、ハンガリア人チョーマ(Csoma Sándor-Alexander Csoma de Kőrös 1784—1842)が、チベット文献を精力的に調査していた。彼の律蔵に関する業績を、ウィルソン(Horace Hayman Wilson 1784—1860)が、はじめて世に問うた。⁽²¹⁾

シナ学の分野では、レニエ(Jean Pierre Abe Rénusat 1788—1832)やジュリアン(Stanislas Julien 1799—1873)が活躍して、漢訳仏典の存在を世に知らしめた。

ビュルヌーフ(Eugène Burnouf 1801—1852)は、一八

二六年に、ラッセン(Christian Lassen 1800—1876)と共に、パリー語の研究書を公刊した。インド学仏教学の知識を吸収しながら、蔵漢仏典の存在を知り、さらには梵語仏典の発見の報告をみて、ビュルヌーフは驚き喜んだ。彼はホジソンに書簡を認める決心をし、一八三四年七月七日にはじめて筆を執って、仏陀(釈迦)の書が梵語で存在するのを知った満足を、感激的に綴っている。⁽²²⁾彼の要請で、パリーのアジア協会に、二十四点の梵語写本が届いたのは、一八三七年四月二〇日頃であった。⁽²³⁾ビュルヌーフは、こと細かに研究状況をホジソンに書き送った。彼は近代仏教文献学の基礎を築いたといえよう。⁽²⁴⁾

このように仏教梵語文献学の構築は、はじめに着実な出発を見せたといえよう。(西欧の研究史については、稿を改めてくわしく論じたいと思う。)

探險家の梵語仏典蒐集

いわゆる中央アジアに、さまざまな目的をもって、足を踏み入れた人の記録は古く、枚挙に暇がない。

第二次世界大戦の後、中国およびソヴィエト連邦の学者が、国境を隔てて、中央アジアの学術調査を進めてきたが、梵語仏典などの発見について、それぞれの報告を追うのは、きわめて困難な状況にある⁽²⁵⁾。いずれにしても、仏教が想像以上に広範な地域に、宣布されていたことが知られる⁽²⁶⁾。今後すみやかに、仏典資料の報告や研究が、公刊されるのを期待したい。旧帝政ロシア時代の資料については、若干知ることがあるが、近半世紀の状況を知りたい⁽²⁷⁾。たとえば、トゥルクメニスタン共和国のマルギアーナ(Margiana)地方(東経六〇度・北緯三八度付近)から、説話集や有部の戒律書(?)など一五〇葉にも及ぶ樺皮写本が出土したと、報告されている⁽²⁸⁾。

十九世紀初頭から第二次大戦までの、近代的な意味での探険家をとっても、相当な数にのぼる⁽²⁹⁾。その中で、仏教文献学史上から見逃すことのできない、主要な探険家・探険隊の名を挙げてみよう。この頃までには、ネパール系写本が、すでに数多くヨーロッパに知られていた⁽³⁰⁾。

パウアー写本 パウアー(Hamilton Bower 1858—1940)

を組織し、一八九三—九七年、一八九九—一九〇二年、一九〇五—一九〇九年、一九二七—三三年、一九三三—三五年と、二つの大戦で足止めさせられながらも、広範な調査行を成し遂げている。もともと地理学者であったヘディン⁽³¹⁾は、文献の蒐集にはあまり興味を示さなかったようで、かなりの蒙古文仏典をストックホルムに将来したが、梵語仏典については、少なくとも蔵書目録などを目にしたことがない。しかし、彼もまた、その徹底した調査を通して、多くの研究者を育て、自身も多数の著作を公刊し、各国語に翻訳されているし(日本には全集にもなっている)、資料の調査報告は数十冊に及び、しかも未だに刊行されているなど、他の学者や探険家に与えた影響は測り知れないものがある⁽³²⁾。

デュトルリュ・ドゥ・ラン 次の驚くべき発見は、一八九二年にデュトルリュ・ドゥ・ラン(Jules Léon Dutreuil de Rhins 1846—1894)が、グルナール(Joseph Ferdiand Grenard 1866—?)と共に、コータン(干闥・和田)で入手したといわれる卷子本型の樺皮写本である。その片割れが、一八九七年に、露都のオルデンブルグ(Sergei

が、一八九〇年三月初旬に、庫車(Kucha)付近で入手した、ボーティー型の樺皮写本は、広く「パウアー写本(Bower Manuscript)」と呼ばれているが、実は大孔雀明王経などを含む七種の写本で、四世紀後半に書写されたものと、調査を委嘱されたヘルンレ(A.F. Rudolf Hoernle 1841—1916)は、詳細に論じている⁽³³⁾。たとえ書写された場所が、インドであったとしても、中央アジアの仏教遺跡から梵語写本の出土したことは、研究者や探険家にとって大きな驚異であり、与えた衝撃と刺激はきわめて大きいものであった⁽³²⁾。「その後、たとえ小断片たりとも、たとえまた随行者たりとも、発見・入手した人の名を冠して、写本を呼ぶ習慣が長らく続いた。——その後、入手地・保管地を名称に用いることもあり、実際に書写された土地と混同されて紛らわしいとする学者もいるが、コータン本などという、特に西欧語でいえば、書写された言語か土地か、却って混乱を招く。ほとんどの場合は、通称の方が便利であるともいえる」。

ヘディンの探険 時を同じくして中央アジアをはじめを訪れたヘディン(Sven Hedin 1865—1952)は、探険隊

Fedorovič Oldenburg 1863—1934)の許に、ペトロフスキ(註27参照)から届いた。法句経の断片であった。その言語は、ガンダーラを中心に、広くコータンやクロライナ(樓蘭)にまでも公用語として通用していたといわれ、ベイリー(Harold W. Bailey 1899—)教授が、ガンダーラ語(Gandhari)と名付けたものである⁽³⁴⁾。この法句経の、精緻きわまる校訂本を出版したブラフ(John Brough 1919—1984)が、いわゆる発見・研究史を詳論している⁽³⁵⁾。いながら、発見場所は、玄奘のいう瞿曇伽(Gosinḡa)山の僧院趾で、グルナールの記述から、スタインが比定・実見している⁽³⁶⁾。この言語資料は、ダルド語(Dardic)群など北西部の中期インド語の研究上からも重要である⁽³⁷⁾。仏教文献学・文化史上も看過できない⁽³⁸⁾。

スタインの業績 ブダペストに生まれ、独英に留学して、英国籍を得、カーブルに客死した探険家スタイン(Mark Aurel Stein 1862—1943)は、正鵠を射た報告書や旅行記を数多く世に送り、中央アジアの考古学研究史の上で、特記するに値する⁽⁴⁰⁾。公的に第一回の調査(一九〇〇—一九〇一年)で得たインド・イラン語系の写本類も、

かなりの量になる。彼が一九〇〇年の暮に、はじめて写本を自分の手にした時の感激的な描写は、読者の胸を打つ⁽⁴¹⁾。それはコータンの東北方向の、東経八一度・北緯三七度五〇分辺りのダンダーン・ウィリク (Dandan Uiliq) 地区の仏教寺址であつた。その地から発見された写本類は、ヘルンレの協力を得て整理されている⁽⁴²⁾。さらに、真東の東経八四度付近のエンデレ (Endere) 地区の遺跡からも、かなりの量の写本類が出土し、同様な報告がなされている⁽⁴³⁾。ニヤ (Nia) 地方では、この種の写本類は、入手していないようである。

スタインの第二回中央アジア探険は、一九〇六年から一九〇八年の二年七か月に及ぶもので、その時に入手した写本類は膨大な量にのぼったが⁽⁴⁴⁾、この間の最も劇的なものは、敦煌文書である⁽⁴⁵⁾。

第三回の探険 (一九一三—一九一六年) も、甘肅からタクラ・マカン沙漠全域の広範なものであつた。

スタインが、中央アジアから将来したインド・イラン語系仏典の白眉は、法華経の貴重な梵本断片を含んで⁽⁴⁶⁾、多量の出土品を見たコータンの東方百数十キロのドモコ

(Donoko) 地区のカーダリック (Khadallic) 近辺の遺跡 (東経八一度二分・北緯三七度五分付近) であろう⁽⁴⁷⁾。

カーダリックおよび他の地域から出土した多くの断片類の目録を、ヘルンレが作製して、一九一八年、その死の直前に、スタインの許に届けた。この目録が、トーマス (Frederick William Thomas 1867—1950) によって、校合・公刊されたのは慶ばし⁽⁴⁸⁾。

ヘルンレの貢献 ヘルンレは、すでにこの道で一家を成していたので、スタインから委嘱されたもののほかに、一九〇七年にカシニガールの総領事マッカートニー (George Macartney 1867—1945) や同所に駐在のマイルズ (P. J. Miles) などから一九〇三—四年に送り届けられた資料を、当時第一線で活躍中のヨーロッパの学者の協力を得て、一書にまとめあげて公刊し⁽⁴⁹⁾、中央アジアの古典籍研究の範を垂れたが、続刊に着手しながら他界して、ついに第二巻は未だに世に出ていない。

今世紀初頭以来、多くの学者が、中央アジアの仏教典籍の研究を力説しながら、行末も知れず、未整理・未比定のままになっている資料も数知れないのが実情であ

る。この労多くして功少なき基礎仏教学の分野に挑戦する学徒の輩出を、更めて期待したい。わが渡辺海旭 (1872—1916) は、在欧中に、原典比定の労を惜しまなかつたことが、他の学者の論文などからも知ることができるし、この分野の彼自身の報告には、きわめて簡にして要を得た好論文がある⁽⁵⁰⁾。前掲のヘルンレの編著書で、仏典が南条目録⁽⁵¹⁾によって分類されている点からも、影響の程が知られよう。

ドイツの中亜探険隊 仏教梵語文献学の上から、もっとも大きな業績を残したのは、プロイセン王国の派遣した中央アジア探険隊であろう。第一回目は、一九〇二年から翌年にかけて、グリュンヴェーデル (Albert Grünwedel 1866—1935) を隊長に、若くして没したが多才のフート (Georg Huth 1867—1906) 隊員と、技術屋としてのみでなく他の多くの特異の才能を買われて全四回に参加したバルトウス (Theodor Bartsch) が随行した。調査がトウルファン地域であつたために、ドイツのトウルファン探険 (隊) (最初は Königlich Preussische Turfan-Expeditionen, その後 Die vier deutschen Turfan-

Expeditionen) と呼ばれるようになり、その蒐集品を Turfan-Sammlung とか Turfan-Funde と称することになった。仏教以外のものの存在を重視したドイツ探険隊は、次に一九〇四年から翌年にかけて、フォン・ル・コック (Albert von Le Coq 1860—1930) を選んだ。これに続行した形で、一九〇四年から翌年まで、グリュンヴェーデルが再び加わり、第二回目に調査をコムル (Gomul) ままで伸ばし、三回目は更にクチャとカラシャル (Karashar) をも調査区域に入れて、一九〇五年末から一年半近くを中央アジアで過した。第四回目は、グリュンヴェーデルが抜けて、一九一三年六月から翌年二月まで、クチャとマラルバシを調査した。

ドイツ探険隊は、美術史に造詣の深い学者が先導し、ベルリンの民族学博物館の研究者も影響を受けて、蒐集・調査に力を注いだために、仏教説話など文献学の上からも、無視できない資料 (およびその報告) の多いことを、つけ加えておきたい⁽⁵²⁾。この伝統は、現在のドイツのインド学界にも、綿々と受け継がれてきている。

スタインは、主にタクラ・マカン沙漠の南側に重点を

置いたが、ドイツのトゥルファン探險隊は、天山南麓を中心に活躍した。

ドイツ探險隊の調査で、世界のインド学仏教学界を驚かせたのは、梵文劇曲の最初を飾る馬鳴 (Aśvaghoṣa, ca. 2c.) 作の舍利弗物語 (*Śāriputra-Prakaraṇa*) (九幕) とほか二作の貝葉写本断片である。⁽⁵⁵⁾ 恐らくは、フォン・ル・コックが、一九〇六年一月に、大きな感激をもって、庫車の西方の Ming-oi (明尾) (ca. 82°30'E, 41°45'N) の堂内の書庫 (經藏) に見出した多数の写本の中にあつたものと思われる。⁽⁵⁶⁾

気の遠くなる程の小断片を整理して、逸早く貴重な資料を江湖に知らしめたのが、リューダース (Heinrich Lüders 1869—1943) であつた。⁽⁵⁷⁾ その夫人 (Else Lüders-Peipers 1880—1945) を含めて、ドイツ探險隊のトゥルファン蒐集資料の整理・研究に多大の影響を与え、その方法は今日にまで伝承されてきている。

馬鳴の作品は、プラークリットの使用についても、特異な面を有し、ついでには仏陀と大雄が共に半マガダ語 (Ardha-Māgadhī) の古形を用い、最古の仏典もこれで編

まれ、更に梵巴その他に翻訳されていたという、ドイツ学派の説ともいふべきものを形成した。⁽⁵⁸⁾

馬鳴作であるか否かで、同じくレヴィ (Sylvain Lévi 1863—1935) との間に論争を起し、未だに決着をみない貴重なカルパナーマンディティカーの写本も、ドイツ探險隊が齎したもので、リューダースが公刊した。⁽⁵⁹⁾

その後、ドイツ探險隊の将来した梵語写本は、リューダースからヴァルトシュミット (Ernst Waldschmidt 1897—) 教授とその弟子たちに、研究が受け継がれてきた。ほとんどの原本が、現在は東ベルリンの学士院に保管されているが、梵文資料の整理・研究の中心はゲッティンゲンに移った。膨大な企画の一つが、梵語資料の目録作成であり、小断片をも洩らさず、精緻を極めた記述は、単なる目録というよりは、研究成果の公刊というべきである。⁽⁶⁰⁾ 本目録には、詳しい発見・研究史や校訂出版の書誌目録も見出すことが出来て便利である。判明した典籍名も分類して列挙され、知られる部派名も示されている。⁽⁶¹⁾ 正確なローマ字化原典を公表し、できるだけ多くの写真複製を載せているのも、とくに未比定の典籍への衆

智を期待してのことである。⁽⁶²⁾ 最新巻に僅に一書をなす程の語彙索引を付したのも (IV pp. 371—627)、同じ期待をこめてのものであろう。

梵語仏典の辞書の編纂も、着実に進んできている。⁽⁶³⁾ 世界に唯一つ、仏教研究委員会をもつゲッティンゲン学士院の活動に注目したい。

なお、梵文写本資料の古文字を、調査分類して、好著を出版したザンダー (Lore Sander) 博士は、目録作製に最初から大きな貢献をなしてきた。⁽⁶⁴⁾ いま彼女は、エンメリック (Ronald E. Emmerick) 教授を輔けて、コータ

ン語文献の古文字の調査にも力を傾けている。

大谷探險隊 ドイツ探險隊と時を同じくして、わが大谷探險隊も中央アジアに派遣される。三回に亘る調査行 (一九〇二—四年、一九〇八—九年、一九一〇—一四年) で、多くの困難に遭遇しながら、相当な量の資料を将来した。⁽⁶⁵⁾ 大半が、いま龍谷大学図書館に蔵されて、研究が推し進められていることは周知のことである。⁽⁶⁶⁾ 梵語仏典資料についていえば、旅順博物館に保管されていたものも、無事に残っている由である。⁽⁶⁷⁾

ペリオの功績 スタインと並んで有名なペリオ (Paul Pelliot 1878—1945) が、一九〇六年から翌々年にかけて行なった中央アジア探險によって、各地から齎した資料の質と量は、彼の博識と語学力を遺憾なく発揮したもので、他に比類をみない。⁽⁶⁸⁾ 本稿では触れない、敦煌の藏漢資料に関しても、それ自体の価値はいうまでもなく、仏教梵語文献学上も、見逃すことのできないものが多い。ペリオ蒐集の梵語資料 (Fonds Pelliot sanskrit) の概要については、ポーリ (Bernard Pauty) 氏が、詳細をきわめて、しかも要領よくまとめていて、ひじょうに便利である。⁽⁶⁹⁾ 彼が国立図書館を去って、インド学から離れてしま

い、この後が期待されていただけに、惜しみて余りある。フランスのアフガニスタン考古学調査 フランスとい

えば、シトロアン (André Gustav Citroën 1878—1935) が、派遣した自動車による探險隊 (一九三一年) にはじまり、アフガニスタンを中心にした考古学調査団 (Délégation archéologique française en Afghanistan) は、現在なお世

瞠目すべき成果が多いが、文献資料については、知るどころが少ない⁽⁷⁶⁾。

その他にも、インド・イラン語系の仏典を、中央アジアから将来した人も少なくないが、紙幅に限りがあるので、ここでは二三の興味ある例を挙げるに止めたい。

ハンティングトン 米国の地理学者ハンティングトン (Ellsworth Huntington 1876—1947) が、一九〇五年に、カードリックで得た僅かの断片の中に、法華経梵本の小破片があり、現在、彼が教鞭を執っていたイエール大学の図書館に蔵されていた。それが奇しくも、スタインが入手して、いま大英図書館に現存する、謂う所のカシユガル本の第二八二葉の泣き別れたものであることを知った時の筆者の興奮は、いまだに冷めぬものがある⁽⁷⁷⁾。この種の例は、同じ法華経梵本の、スタイン・ペトロフスキー⁽⁷⁸⁾ 一両蒐集写本にもある。

マンネルハイム スカンディナヴィア諸国から、中央アジアに派遣された探険隊は、余り知られていないが、決して少なくない。フィンランドの英雄的な軍人マンネルハイム (Carl Gustav Emil von Mannerheim 1867—1951)

も、一九〇六年から翌々年にかけての中央アジアの探険で、若干の写本類を齎している。その優れた研究も、ロイテル (Julio Natanel Reuter 1863—1937) によって公刊されているが、正確な現在処が不明である⁽⁷⁹⁾。

トリンクラー ドイツの地理学者トリンクラー (Emil Trinkler 1866—1931) が、一九二七年から翌年にかけて調査した中央アジアより将来した九葉は、カシユガル本法華経の一部 (第二四四—二五二葉) であった⁽⁸⁰⁾。

おわりに

かなり完備した大きなコレクションの目録をみても、いまだに研究者を待つ写本は多い。小断片には、未比定のもものが、山積している。どんなコレクションが、どこにあるのかを知るだけでも容易ではない⁽⁸¹⁾。今は、そのはしがきを、きわめて短絡に、認めたに過ぎない。

写本類には、門外不出の秘宝の如く、眠らされているものも数多い。たとえば、レーニングラードのソ連邦科学院東洋学研究所のコレクションは、若くして夭折したヴォロエヴァ・デスヤトフスキー (V.S. Vorob'eva

Desiatoskij 1927—1956) の精力的な比定研究のあとを受けて、漸く関心は高まってきているが、世界中の文献学者たちは、それでもなお歯痒い思いを募らせている。

そこで探険家あるいは所有者の功と罪が喧しく問われる。彼らは、本来の所有者(者)から、盗賊呼ばわれさえることがある。一方は、自分たちのおかげで、絶滅や破損から救われたと、反駁する。いずれにしても、これら仏典の写本類は、信仰の篤い人たちが遺してくれた、人類共通の文化遺産であるという原点に立たなくてはならない。

仏教梵語文献の発見史を簡略に述べて、現存する典籍の具体的な記述と書誌学的な報告を試みるべくして筆を執ったが、そのいずれも満足させ得ぬままに、与えられた紙数をはるかに逸脱してしまった。読者の寛恕を乞う次第である。一つのコレクションを、詳述すれば、優に一書を編まなくてはならないであろう。

ほかに、中央アジアのインド・イラン系の仏教典籍の成立・増広・伝播の過程、小乗・大乘・密教典籍の分類、あるいは所属の部派の決定、といった山積する難問

題は、言語学その他の学際的協同の必要もさることながら、先に述べた資料の整理という出発点にも立てないでいるのが現状といえよう。基礎仏教学の構築を目指す人材の輩出を、くりかえし祈念して止まない。

付録(一) ギルギット出土の写本類

中央アジアの梵語仏典資料を考究するために、ギルギット出土の資料は重要な位置を占める。最近になって原写本の覆刻出版も出るようになり、⁽⁸²⁾ 原典の批判的な研究も着実に増えてきている⁽⁸³⁾。日本に古くから遺る貝葉写本断片類の中には、ギルギット系写本の古層を想わせるものさえある。小乗・大乘に加えて密教の典籍も発見されている。

付録(二) イラン語系写本類

中央アジアの梵語仏典の研究、ひいては仏教史研究の上から、イラン語系の仏典写本類の研究成果を、無視することはできない。後者の研究陣には、言語学的関心をより強くもつ西欧の学者が多い。彼らが、とくに日本の

仏教学者の協力を渴望する由縁である⁽²⁹⁾。多くの重要な経典類がみられるし、翻訳史の上からも興味深い問題を含んでいる⁽³⁰⁾。

コータン語仏典の文献学的研究は、記念すべき集大成としての、辞典の出版を江湖に送った⁽³¹⁾。今後の原典批判・語彙研究に、飛躍的な発展が期待される⁽³²⁾。他の中央アジア古語仏典の文献学的研究も、活発さを増してきている。

仏教梵語文献学も、地味ながら、研究の進捗がみられる。しかし、エジプトンの文典・辞典の公刊以来、すでに三十年を過ぎて、その業績の持つ意味が、建設的に正しく評価されているだろうか。道はまだ遠し。

註

- (1) 西独ゲッティンゲン大学教授ヒンリッヒ・ベッセル (Heinz Becher) 博士の未公刊の教授資格論文 (Habilitationsschrift) の一部を断片改稿した “Buddhist Sanskrit Literature in Sri Lanka” と題する講演 (一九八二年三月二十七日国語仏教学研究所主催) の増補訂稿の早期出版が望まれる。

- (2) See Hema Ratnayaka and Saddhamangala Kar-

baden: Otto Harraswitz, 1954), 220 pp., 18 Abb.

- (30) Cf. e.g. A. Yuyama, *Indic Manuscripts and Chinese Blockprints (Non-Chinese Texts) of the Oriental Collection of the Australian National University Library* (Canberra 1967), viii, 124 pp.

- (31) See e.g. *Katalog' knigan', rukopisniam i kartam', na kitajskom', mančžurskom', mongol'skom', tibetskom' i sanskritskom' jazykaz', narodnajačinsjia v' Biblioteka Azjatskago Departamenta* (Sanktpeterburg, 1843), pp. 83—95 (Tib.), 96—99 (Skt.); Otto Böhtlingk, “Über einige Sanskrit-Werke in der Bibliothek des Asiatischen Departements”, *Bulletin de la Classe des Sciences hist., philol. et polit. de l'Acad. Imp. d. Sciences de Saint-Petersbourg*, II, 22 (1845), Sp. 339—349; —, “Verzeichnis der auf Indien bezüglichen Handschriften und Holzdrucke im Asiatischen Museum der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften”, *Das Asiatische Museum* (St. Petersburg, 1846), pp. 720—736 [Berichte bis 1844]; Anton Schiefner, “Nachträge zu den O. Böhtlingk und I.J. Schmidt verfassten Verzeichnissen der auf Indien und Tibet bezüglichen Handschriften und Holzdrucke im Asiatischen Museum...”, *Bulletin...*, V (1848), Sp. 145—151; —, “Berichte über die neueste Büchersen-

unaratna, UNESCO-Sri Lanka Cultural Triangle Project—*Jetavana Project—Jetavanarama Gold Plates—Pratyapararnita Sutra* (= Publication, No. 11) (Colombo 1983), 26 pp.

- (32) Cf. e.g. Nandasena Mudiyansse, *Malayana Monuments in Ceylon* (Colombe etc.: Gunasena, 1967), p. 83.

- (4) Cf. e.g. Walter Liebenthal, “Sanskrit Inscriptions from Yünnan”, *Monumenta Serica*, XII (1947), pp. 1—40, VIII plates, *Sino-Indian Studies*, V, 1 (1955), pp. 46—68, 3 plates; 汪華生・雲南考古 (昆明・雲南人民出版社 一九八〇年) 及び夏光南・元代雲南史地叢考 (台北・台灣中華書局 一九六八年 [原稿一九三五年]) 中の図版参照。

- (5) 例として徐嘉瑞著 (李家瑞校)・大理古代文化史稿 (商務・三聯書店 一九七九年) 二九三頁以下参照。Cf. also Charles Backus, *The Nan-chiao kingdom and T'ang China's southwestern frontier* (Cambridge University Press, 1981) [with extensive bibliography].

- (6) Cf. e.g. E. Rosner and K. Wille, “Indische Elemente in der Gründungslegende des Königreiches Nanchao”, *ZDMG*, CXXXI, 2 (1981), pp. 374—383.

- (7) Cf. esp. Walther Heissig, *Die Fekinger lamasischen Blockdrucke in mongolischer Sprache* (Wies-

lung aus Peking”, *Bulletin...*, IX (1852), Sp. 10—14, 17—32 [= *Mélanges Asiatiques*, I, 4 (1851), pp. 405—429] / O.M. Kowalevskij, “Katalog' sanskritskim', mongol'skim', tibetskim', mančžurskim' i kitajskim' knigan' i rukopisniam', v' Biblioteka Imperatorskago Kazanskago Universiteta xranjašimsja”, *Učenjia Zapiski* (Kazan. Univ.), 1834, II, pp. 263—292; V.P. Vasil'ev, “Die auf den Buddhismus bezüglichen Werke der Universitäts-Bibliothek zu Kazan”, *Bulletin...de Saint-Petersbourg*, XI (1854), Sp. 337—365.

- (10) 大谷光圀・西蔵經書目録 (東北大学蔵版) (仙臺・一九五三年)・大谷大学図書館蔵・西蔵文書目録 (京都・一九六三年)・Manfred Taube, *Tibetische Handschriften und Blockdrucke*, I—IV (Wiesbaden, 1966); etc.

- (11) 東北田録六十七四巻 大谷田録一三〇一二巻。
(12) 尺素録・天山南路を往くシルクロード 絲綢之路十冊 (東京・講談社 一九六七年) 三〇—三二頁。

- (13) Cf. Bernhard Kölver, “Das Nepal-German Manuscript Preservation Project: Bericht über die zwei ersten Kampagnen”, *ZDMG*, CXXIII, 1 (1973), pp. *1—*10; “Wissenschaftlichen Nachrichten: Anlage 7—Bericht über das Nepal-German Manuscript Pre-

- thèque Nationale. Catalogue dressé par Léon Feér (Paris: H. Champion, 1899), p. 148.
- (23) cf. *Ibid.*, p. 157; 定方最「ペリ国立図書館所蔵のサンクリット写本とその目錄」印仏研「十四二(一九六六年)」、八四二(一五五)頁の注12参照。
- (24) Burnouf, *Introduction à l'histoire du Bouddhisme indien*, I (Paris: Imprimerie Royale, 1844), v, 647 pp., Deuxième éd. (Paris: Maisonneuve, 1876), XX XVIII, 587 pp.; *Le Lotus de la Bonne Loi* (Paris: Imprimerie Nationale, 1852), v, iv, 897 pp., Nouvelle éd. (Paris: Maisonneuve, 1925), v, iv, 897 pp.
- (25) 中国の調査は「中国社会科学院・北京大学の南亞研究所長・季羨林博士の指導の下に、推進されてゐる由である。イン・イラン語系仏典に関する報告の専書を寡聞にして知らない。最近刊の次著一点のみを紹介しておく。新疆社会科学院考古研究所編・新疆考古三十年(ウルムチ・新疆人民出版社、一九八三年)「三、五、七九六頁、三〇九図版他多数挿画。
- (26) ソ連領中央アジアの調査については、個々の発表も決して少なくない。少し古いが、次の三点を挙げるに止めろ。V.M. Masson, *Archaeological Study of Soviet Central Asia* (Moscow: Nauka, 1968), 30 pp.; I. S. Braginskij, L.M. Landa and N.A. Khalifm, *Central*
- Asia and Kazakhstan in Soviet Original Studies* (Moscow, 1968), 39 pp.; Grégoire Frumkin, *Archaeology in Soviet Central Asia* (Leiden-Köln: E. J. Brill, 1970), XVIII, 217 pp., LXVII plates, 39 figs., 19 maps.
- (27) カン・ガル総領事時代に買ひ集めたペトロフスキー(N.F. Petrovskij 1837-1908)のコーニンズラールに保管されるコルクシモンを中心とした記述は「ボンガル・レーヴェン博士が各所ぞ発表してゐるが、次の一点を著したのが」G. M. Bongard-Levin, *Studies in Ancient India and Central Asia* (Calcutta: Indian Studies Past and Present, 1971), pp. 229-237. "New Buddhist Texts from Central Asia".
- (28) Boris Slavitsky, "Buddhist Monuments of Ancient Merv", *Buddhist for Peace*, III (Ulan Bator, 1980), pp. 29-33.
- (29) たとえば、深田久弥・中央アジア探検史(東京・白水社、一九七一年)(第七刷一九八〇年)中の「近代中央アジア探検年表」(五四三-五五八頁)参照。
- (30) 中央アジアの仏典写本類の言語、文字、材料、書写具、型、年代などについては、井ノ口泰淳「シルクロード出土の仏典」シルクロードと仏教文化(東京・東洋哲学研究所、一九七九年)「一八一-二八頁」(東洋学術研究、十七・六・一八一-一九七八年十一月・一九七九

年一月刊)初収)参照。なお、中央アジアの仏教考古学・文化史あるは仏教典籍について *Encyclopaedia of Buddhism*, IV, 1 (Colombo, 1979) 所収の次の二頁目が、簡にして要を得た好論文である。惜しむるは、脱稿後出版までに長年月を経たこと、編集面での不届なところがあること、注意を要する誤脱があること。B.A. Litvinsky, "Central Asia", pp. 21 b—52 b, Lore Sander, "Buddhist Literature in Central Asia", pp. 52 b—75 b.

- (15) *The Bower Manuscript: Facsimile Letters, Negari Transcript, Romanized Transliteration and English Translation with Notes* (Archaeological Survey of India), 3 parts (Calcutta: Superintendent Government Printing, 1893—1912), xcvi, 1—152, 153—401 pp.; LIV plates (+1 p.) [incl. 31 figs., IV maps, V tables] (Reprinted in New Delhi, 1983).

(35) この貴重な歴史的発見を、當時の学問界の中心人物 J. Waterhouse) に宛てた書簡 (一八九〇年九月一五日付) が、大谷大学に保管されているのは興味深い。これは一九二〇年三月に偶々、泉澤環 (1884—1947) がケンブリッジの有名な古書肆 Heffer (現在は新刊書のみ扱かう店) で求めたケルンン文庫の中であつたものである。彼の「西域発掘の梵語古経典——ケルンン文庫を回顧して——」仏教研究、三三四 (大谷大学、一九二二)

二年) 一一三 (五七九—一一二四 (五九〇) 頁も、好まれている。因みに、先の書簡は、該語同書の巻頭の序頁に掲げられている。

- (36) Cf. e.g. Sven Rinnman, "Förteckning över Sven Hedin tryckta skrifter", *Kyhlingskrift tillägnad Sven Hedin* [Seventieth Birth Anniversary Volume] (Stockholm, 1935), pp. 1—21; also *Reports from the Scientific Expedition to the North-Western Provinces of China under the Leadership of Dr. Sven Hedin* (*The Sino-Swedish Expedition*) (Stockholm: The Sven Hedin Foundation / Statens Ethnografiska Museum): Publication, I (1937) —.

(37) H.W. Bailey, "Gāndhārī", *BSOAS*, XI, 4 (1946), pp. 764—797, esp. p. 764 f.

(38) Brough, *The Gandhārī Dharmapada* (London: Oxford University Press, 1962), xxv, 319 pp., XXIV plates.

(39) 「大唐西域記」卷十二・大正藏二二〇八七卷「五十一卷九四三頁上欄—四行」。

(40) *Ancient Khotan: Detailed Report of Archaeological Explorations in Chinese Turkestan*, carried out and described by M. Aurel Stein, Vol. I (Oxford at the Clarendon Press, 1907; reprinted by Hacker Art Books, New York, 1975), pp. 185 ff., esp. p. 188,

- (38) Cf. e.g. D.I. Edel'man, *Darśhīe Jazyki* (Moskva, 1965), 203 pp. ('Bibliograph', pp. 200—202); also Graham E. Clark, "Who were the Dards? A Review of the Ethnographic Literature of the North-Western Himalaya", *Kailash*, V, 4 (1977), pp. 323—356 ('Bibliography', pp. 347—356).

(39) Cf. e.g. Franz Bernhard, "Gāndhārī and the Buddhist Mission in Central Asia", *Aryai* (Wiesekera Volume) (Peradeniya, 1970), pp. 55—62.

- (40) スタンレー・レーンに記された種々の発見は、その中で最も重要な発見である。この発見は、Jeanette Mirsky (1903—), *Sir Aurel Stein: Archaeological Explorer* (Chicago—London: University of Chicago Press, 1977), xiii, 585 pp., photos, maps, frontisp.
- (41) See Stein, *Ancient Khotan*, I, p. 256 f.
- (42) See Stein, *op. cit.*, I, pp. 288—303. "List of Objects excavated or found at Dandān-Ulliq", esp. pp. 294—297, 299.

(43) See Stein, *op. cit.*, I, pp. 438—440: "List of Antiques from Endere Ruins"; cf. also *op. cit.*, II: Plates.

(44) See esp. *Innermost Asia: Detailed Report of Explorations in Central Asia, Kan-su and Eastern Iran*, carried out and described by Aurel Stein, Vol. II:

Text (Oxford at the Clarendon Press, 1928): Appendix E "Inventory List of Manuscript Remains mainly in Sanskrit", by F.E. Pargier, pp. 1017—1025; Appendix F "Inventory List of Manuscript Remains in Sanskrit, Khotanese and Kuchean", by Sten Konow, pp. 1026—1028; Appendix G "Notes on Manuscript Remains in Kuchean", by Sylvain Lévi, p. 1029 f.; Appendix H "Notes on Manuscript Remains in Sogdian", by E. Benveniste, p. 1031; Appendix K "Inventory List of Manuscript Fragments in Uighur, Mongol, and Sogdian", pp. 1047—1049; Appendix R "Notes on the Tibetan Manuscripts Illustrated in Plates CXXX—CXXXIII", by F.W. Thomas, pp. 1084—1090.

(45) 敦煌文書の発見・入手の経緯については、次の詳細かつ正確な論考は不可欠のものである。梅村坦「敦煌探検・研究史」講座敦煌 I (東京・大東出版社、一九八〇年) 一二二—一二四頁。また、金岡照光・敦煌の文学 (東京・大蔵出版社、一九七一年) の二一—二五頁「敦煌の写本」参照。

(46) 法華経典については、本書所収の戸田宏文教授の論文を参照せよ。今は拙著を引用しておきたい。『*A Bibliography of the Sanskrit Texts of the Saddharmapundarikasutra* (Canberra, 1970), pp. 23 ff.

9—*11* ; -- , "Die Bedeutung des Handschriftentumfundes bei Gilgit", *ZDMG*, Suppl. V (1982), pp. 47—66.

(79) 紙数を余りに超過したので、幸いに次の二著を参照された。 Ronald E. Emmerick, *A Guide to the Literature of Khazan* (Tokyo: The Reiyukai Library, 1979), vii, 63 pp.; David A. Utz, *A Survey of Buddhist Sogdian Studies* (Tokyo, 1978), iv, 26 pp. 同に要領で、いわゆるトカラ語およびウイグル語の伝典について、同叢書に収める計画である。

(ゆやま あきら・国際仏教学研究所所長)

pp. 66–71; but Bailey, *Annals of Armenian Linguistics*, IV, 1983, p. 1).

(38) Cf. e.g. R.E. Emmerick and P.O. Skjaervø, *Studies in the Vocabulary of Khotanese* (= *Sitzungsbd. d. Österr. Akad. d. Wiss., Philos.-hist. Klasse*, 401) (Wien, 1982), 133 pp.

(8) 中央アジアの仏教文献学・仏教史学に関心をもち、学徒にわたって次の近刊の三論文集は見逃せられず。*Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, edited by J. Harmatta (Budapest: Akadémiai Kiadó, 1979), 359 pp.; *Manuscripts et inscriptions de Haute Asie du Ve au X^e siècle (= JA, CCLXIX, 1-2: Numéro spécial, 1981)*, IX, 407 pp., incl. pl., figs. carte; *Sprachen des Buddhismus in Zentralasien*, herausgegeben von Klaus Röhrborn und Wolfgang Veenker (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 1983), VII, 142 pp.

(53) H.W. Bailey, *Dictionary of Khotan Saka* (Cambridge University Press, 1979), xvii, 559 pp. (cf. R.E. Emmerick, *Guide*, p. 12 f, *IIJ*, XXIII, 1981,